

大賞

「こねこのクリスマス」の思い出

田崎 明

柳田邦男先生こんにちは。私は荒川区でごみ収集作業員をしています。毎日仕事をしていると色々なことを経験します。今日はその中の一つをお話したいと思います。

清掃事務所ではみなさんのお宅から出されるごみや、粗大ごみ、資源ごみの収集をしています。お宅で飼われていて亡くなったいぬやねこなどのペット、路上で轢かれたりして死んでしまった動物の回収も行っています。あまり知られていませんが動物たちはその後、ペット霊園で手厚く供養されます。

ある日、清掃事務所にねこが死んでいる、との通報がありました。住民の方により、すでにビニール袋に入れ

られて集積所に置いてある、とのことでした。現場に着き確認すると、小さなこねこでした。かわいそうに、と思いつながら袋を持ち上げると、いきなり、にゃあ、と鳴き声がしました。うわーっ、と私は心臓が停まる程驚きました。もう一度恐る恐る袋の中をのぞいて見ると、死んでいるはずのこねこがもぞもぞと動いています。さすがに生きている動物は回収出来ません。でもそのまま置いていく訳にもいきません。一体どうしよう、と困ってしまいました。こねこをさわると体が冷たくなっていたので、このまま死んでしまうのは時間の問題です。このまま見殺しにしてもいいのか。私にはできません。動物病院へ連れて行くことにしました。車のヒーターを目一杯に上げ、こねこを手の平で包んで温めました。獣医さんによると目もまだ開いていないので、おそらく生後一週間程ではないか、とのことでした。低体温症を起こし

ていて自分でミルクを吸う力もない程衰弱しているので、すぐに入院とのことでした。注射を打たれ、私の小指より小さなこねこの足に点滴のチューブがつながれている姿はとても痛ましい感じがしました。どうか助かって、と私は祈りながら動物病院を後にしました。幸い、その後こねこは自分で哺乳瓶からミルクを吸える程回復し、一週間ほどで退院することができました。

我が家にはいぬが一匹にねこが三匹います。みんな捨てられていたり、車にはねられて死に掛けていたり、前の飼い主が事情があって飼えなくなってしまった子たちです。これ以上動物が増えるのは大変ですが、私はこねこを引き取ることにしました。人間より動物の方が多い我が家です。そんな環境なので、二人の子どももすっかり動物好きに育ちました。読み聞かせた絵本は動物が出る物語が多かったです。特に次女はねこが大好きで、

一番気に入っている絵本が『こねこのクリスマス』です。捨てられて雪の中をさ迷っていたこねこがサンタクロースに助けられます。クリスマスイブの夜、サンタクロースは子どもたち一人一人に、その子にぴったりのプレゼントを選んで配ります。お友達がほしい、と思っていたおんなの子にサンタクロースは助けたこねこをプレゼントします。クリスマスの朝に起きた子どもたちは、欲しかったプレゼントをもらえてみんな大喜び。もちろん、おんなの子も。我が家で引き取ったこねこはこの絵本の中のこねこと偶然同じ柄でした。次女にはその姿が重なり合うのでしょう、寝る前に『こねこのクリスマス』を読んであげると、こねこはどうなっちゃうの、と真剣な顔をして聴き入り、最後は安心して、ああ、よかった、と泣きながら眠るのがお決まりでした。その次女も小学生となり、今では好きな本を自分で読むようになったの

で、以前のように私が絵本を読んであげることもなくな

り寂しい思いをしています。今でも本棚に並んだたくさん
の絵本の中で、『こねこのクリスマス』の背表紙が目に入
る度、私はあの日のことを思い出します。すっかり成
長して大きくなったねこの頭を、いとおしそうになでて
いる次女。そして次女にされるがまま、気持ち良さそう
に目を閉じて次女に体を任せているねこ。その姿を見る
と私は本当に幸せな気持ちになります。絵本の読み聞か
せをやってやさしい気持ちの子どもに育って本当に良か
った、そしてあの時こねこを引き取って本当に良かった
と私は思います。将来、この子が結婚して子供が生まれ
たら、『こねこのクリスマス』を思い出とともに読んであ
げたいです。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

田崎明さんが二年前の第四回絵本大賞選考の時に応募された
「ごみしゅうしゅう車のしゅうたくん」(東京荒川ロータリークラ
ブ賞受賞)は、とても爽やかで、強く印象に残っています。わが
子が絵本のごみ収集車に興味を持つと、自分が職業にしているご
み収集の仕事を、誇りをもって話してあげたうえに、その実態を
見せてあげることによって、子どもがその仕事の大切さについて
理解を深めるようになる。何とすばらしい父親かと、私は感動し
たものでした。

今回の応募作品は、一編のエッセイとして、読む者の心にほん
わかとした温もりを残してくれるすばらしい作品になっています
ね。清掃作業の中には、死んだ動物を引き取る仕事もある。ある
日、田崎さんは通報で死んでいるというこねこを引き取りに行く。
ところが、こねこを入れたビニール袋を持ち上げると、にゃあと
鳴き声が！生後間もない赤ちゃんねこで、痛々しい。急いで動物

病院に連れて行き救命治療をしてもらう。

蘇生したこねこを、田崎さんは引き取って育てる決心をする。

こねこの柄模様は、偶然にも幼い次女が、寝る前の読み聞かせでいちばん好きな絵本「こねこのクリスマス」のこねこと同じだったという。次女はこねこを可愛がり、歳月を経て小学生になった今では、成長したねこは次女がいると身をまかせて寄り添い、次女に頭をなでられて気持ちよさそうに目を閉じているという。いい風景だなあと思う。

田崎さんは、こう感慨を記す。

へ絵本の読み聞かせをやってやさしい気持ちの子どもに育って本当に良かった。そしてあの時こねこを引き取って本当に良かった」と。

そして、この子が結婚して子供が生まれたら、『こねこのクリスマス』を思い出とともに読んであげたいという。子どもの成長ははやいです。そういう日が来るのは、そんなに遠い未来ではない

ですよ。実際、私も気がつけば、もう孫が五人もいるのですから。

それにしても田崎さん、こねこを見る目も、わが子を見る目も、やさしく、心のあたたかい人なのでしょう。このおたよりは、荒川区絵本大賞六年の中で、ベストエッセイに挙げてよいほどの作品性があります。いのちを救ってあげたこねこ、次女のいちばん好きな絵本のこねこが、同じ柄模様だったとか、絵本の読み聞かせとねこを可愛がるのが重なり合って、子どもがやさしい心の持ち主になったとか、物語の要素がそろいすぎていると言いたくなるほどですが、人は周囲に真摯にあたたかい視線を向けていると、不思議なほどそういう要素がそろってくるのです。なぜなら、人は物語を生きているからです。